夜の旅人

阿刀田高

文春

文春文庫

278—7

夜の旅人

定価はカバーに
表示してあります

1986年10月10日　第1刷

著者　阿刀田高
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16 727807-3

文春文庫

夜の旅人

阿刀田 高

文藝春秋

長篇小説「夜の旅人」目次

夜の旅人　5
あとがき　243
解説　藤田　昌司　247

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

夜の旅人

1

季節が冬に変る日であった。

昭和三十年。渋谷界隈の盛り場も道玄坂を登りきるあたりまで来ると人影もめっきり減ってしまう。町はくすんだ枯色を帯び、街路樹の枝に残る葉の数も少ない。

銀行の店舗を改造した事務室に色だけ暖い斜光が射し込んでいる。窓ガラスがかすかに軋(きし)む。夜になれば、ずいぶん冷たい風が吹くだろう。

粉川忠(こがわただし)は外出から帰って、机の上に積まれた郵便物に目を通した。弟からの手紙。父の三回忌は無事にすんだらしい。故郷の山はもうすっかり冬枯れただろうか。私信に混って数通の古書目録があった。

――明日から古書展が始まるんだな――

その噂は聞いて知っていた。古書探索は粉川にとってなによりも大切な仕事である。だが粉川は人混みの中で本を捜すのを好まない。探書の作業には、研ぎ澄まされた微妙な感覚の必要な部分があって、喧騒の中ではその感覚が鈍ってしまう。それに、古書展に出品されるようなタイトルは、おおかた集めてしまった。掘出し物があれば、出入りの本屋が連絡してくれるだろう。

さしたる期待もなく数冊の展示即売目録の封を切ったあとで、ガリ版刷りの一冊に目を止めたのは、これも微妙な感覚のせいだったろうか。

一瞬、ページを繰る手が止まった。視線がつたない文字の並んだ一行に吸い込まれる。

〈狐の裁判〉　ゲーテ氏原著　井上勤訳述　絵入自由出版社刊　明治十七年。

――本当だろうか――

粉川は立ちあがり事務室に続く書庫内を捜した。

求める本はすぐに見つかった。数千冊の蔵書の位置は掌を見るようによく知っている。彼の手もとにある〈狐の裁判〉は明治十九年に春陽堂書店から刊行されたものだ。

興奮が体の底から込みあげて来る。

「やっぱり……。しかし、本当かな」

声をあげて呟いてみた。

ゲーテ関係の本を集め始めてから三十年近い歳月が流れている。めぼしいものはたいてい持っている。ただ一つ気がかりの本があった。

ゲーテの数多い著述の中で、日本で初めて訳されたのは明治十七年刊行の〈狐の裁判〉。そういう記述を何度か読んだことがある。しかし、現物は一度も見たことがない。

――あれは十年前くらいになるのだろうか――

粉川の連想は広がる。

昭和二十年三月――。その頃懇意にしていた古本屋の竹本が、

「粉川さん、めずらしいものを見つけましたよ」

と、電話で告げて寄こした。

四角張った顔の、律義な男。思わせぶりの癖があって、電話口では本のタイトルを言わなかったが、口ぶりから察して明治十七年版の〈狐の裁判〉らしいと直感した。

粉川はあえてその〝めずらしい本〟の内容を詮索せず「ついでの折に届けてくださいな」と頼んで電話を切ったのだが、竹本もその本も、数日後、下町を焼く大空襲にあって消えてしまった。

以来ただの一度もその本にめぐりあうことがなかった。

あまりのもどかしさに、

――実際には出版されなかった本なのではあるまいか――

とさえ考えてみた。

そういうケースはけっして稀ではない。

出版の計画だけが立てられ、途中で版元が潰れたりする。ろくに調査もしない研究家がなに

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

かのページにその本が実在したと記す。古本屋の竹本も「明治十七年版の〈狐の裁判〉を見つけた」と、はっきり伝えて寄こしたわけではなかったし……。あの時から数えても長い歳月が流れている。十七年版の〈狐の裁判〉は文字通り実在の疑わしい奇書であった。

ところが、その一冊が明日の古書展の即売目録の中に載っている。ただごとではない。

目録を作った本屋は時代屋。世田谷区三軒茶屋と住所が記してある。

粉川は立ちあがってコートを取った。

「またお出かけ？」

「ああ」

怪訝な表情の妻を尻目に一言も説明をせずに家を出た。なにか説明をすれば、たちまち魔術が解けてその本が消えてしまうのではあるまいか、そんな懸念が胸をかすめた。

夕日はビルの向こうに落ち、外の風は案の定冷たい。雲までが凍えている。

だが、その冷たさも苦にはならない。むしろもっと冷たくなればいいとさえ思った。いつの頃からか、好運は苦難のすえにめぐりあうものと思うくせが身についていた。

上通りから玉川電車に乗って三軒茶屋まで。

電車の中で東京都の市街地図を見た。住所から察して時代屋は中里駅で降りたほうが近いかもしれない。

気ばかりがあせる。

――だれか他の人もあの本を狙っているのではあるまいか――

それを思えば駅ごとに止まる電車がもどかしい。

ゲーテの作品はことごとく読み尽した。いくつかの作品は文章までそらんじている。

〈狐の裁判〉は――今では〈ライネケ狐〉と、本来のタイトルで呼ばれることが多いのだが、一風変った小説だ。

悪賢い狐のライネケが登場する。森の動物たちは、ことごとくこのライネケの奸計に操られて、ひどい目に遭っている。そこでこの悪狐に制裁を加えるために裁判が開かれるのだが、奸智に長けたライネケは言葉巧みに罪状を退けてしまう。悪が栄えて善が滅びる、そんな結末だった。

かすかに釈然としない。

ゲーテはあの作品を通してなにを訴えようとしたのか。

まあ、考えてみれば、この世の仕組みにはそんなところがなくもない。闇雲に勧善懲悪を信ずるのは愚かなことだ。ゲーテはそれを知っていたのだろう。

だが明治十七年という時代を考えれば、こんな異端の書がまっ先に訳されたのが不思議でもある。粉川はその時代に生きていたわけではないが、おおよその見当はつく。政事はつねに正しく、裁判は正義を顕わすものと、事実はどうあれ、新政府がしきりに喧伝していた時期ではなかったのか。よくもまあ発禁にならなかったものだ。民権論の影響を受けて訳されたのだろうか。わからない。

――ともあれ、それは研究者が考えればよいこと――

粉川はコートの襟を立てながら思った。

研究したい者があればだれでも研究できるように資料を整えておく、それが大切なのだ。そのためにも〈狐の裁判〉は入手しておかなければなるまい。

――なにかの間違いではなかろうか――

その不安は家を出たときから胸に燻っていた。十九年版を十七年版と書き違えたりして……。しかし十九年版なら春陽堂書店の発行のはずだ。絵入自由出版社などという耳慣れない書店の名が記されているところを見ると、本物くさい。

車輛が大きく揺れて中里駅に着いた。

電車通りを曲がって裏道に入ると、もう人家の数も少ない。住所を頼りに時代屋を見出すまでにはさほどの困難はなかった。

「ごめんください」

立てつけのわるいガラス戸を押しあけ、中へ入ると裸電球の下に灰色の本が乱雑に積んである。

若い男が、

「はい」

と答えた。

店番をしていたのではないらしい。

埃を含んだ、黴くさい空気は粉川にとってなによりも親しみやすいものだ。店の様子から察

すると、時代屋は店頭で商売をするより、仲間うちの競り市や展示会での販売を主とする古書商なのだろう。

粉川は肩をまるめて手短かに用件を告げた。

「そりゃ、親父のほうですよ。家のほうにいますから」

男は指を差して母屋のありかを言う。

店の裏手に住居があった。

「今晩は」

こちらは格子戸の玄関。ガラスの割れ目に桜型の京紙が張ってある。

玄関に面した八畳間で二人の男女がせわしなく動いていた。明日の古書展に出品する本に夫婦で値札をつけているところだった。

「はい？」

主人が胡散くさそうに首をあげる。

視線が下から掬いあげるように飛んで来た。三角の眼。文字通り〝へ〟の字に曲がった唇。長年古本の背を眺めているうちに気むずかしさが顔にこびりついてしまったらしい。

「いそがしいところ、すみませんね。実は明日の古書市に出すおたくの目録の中に、ちょっとほしいものがあったものですから」

「はあ」

粉川はガリ版刷りの目録を取り出し、〈狐の裁判〉のところを指差した。

「これですがね、明治十七年版を前から探していたものですから……ちょっと拝見させていただけますか」

「えーと、どこにあったかな。あ、それだ」

すでに値札をつけ終った山の中から、主人は葡萄色に汚れた本を取り出した。値段は七百五十円也。安い。

一礼して受け取り、まず奥付を見る。明治十七年。絵入自由出版社発行。間違いない。本の大きさも、表紙の色も明治十九年版とは違っている。

むしろあっけなさを覚えた。

——長年探していたものが、こんなにたやすく手に入るとは——

保存のぐあいもさほど悪くはない。

粉川はポケットの財布をさぐりながら、

「これを売ってくださいな」

と告げた。

主人は奇妙な表情で客を見据えた。

——足もとを見ているな。掘出し物だからいくらか色をつけてもいい。千円も出せばいいのかな——

相手は粉川のそんな思惑に気づいているのかどうか、頭のてっぺんから足先までを観察したところで、

「売れん」
と、ぶっきらぼうに吐いた。
臍曲がり屋の多い商売だ。これまでにもこんな処遇を受けたことは何度もある。なにか気に障ることを言っただろうか。
「前々からゲーテの本を集めていて、この一冊がどうしても見つからなくてねえ。どうか譲ってくださいな」
「売れませんな」
「お売りになるために展示会にお出しになるんでしょ」
「そう」
「じゃあ、どうして私に売っていただけないんですか」
粉川はやんわりと詰った。
こんな場合には低姿勢に出ること、それから誠意を示すこと、それよりほかに道はない。
「いや、売りますよ、あなたにだってだれにだって」
「はあ？」
相手の了見がよくわからない。
「ただ今日は売れん」
「……」
「目録を見たでしょうがな。明日の展示会には、それだけの本を持って行きます。一品たりと

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com